National Parks of Japan

尾瀬国立公園

木道に導かれて雄大な自然と語らう

国立公園ものがたり

尾瀬国立公園

木道に導かれて
雄大な自然と語らう

国立公園ものがたり

尾瀬国立公園とともに歩む

日本の国立公園は、アメリカなど世界のいくつかの国立公園と異なり、集落や農林水産業などが行われている地域も含めて公園区域に指定していることから、公園内に人々の暮らしや産業があるのが大きな特徴です。そのため、国立公園の管理は、これらの人々の暮らしや産業などとの調整を図りながら、地域の人々とともに進めています。

本誌の舞台である尾瀬国立公園は、かつて日光国立公園の一部として長らく守られてきた尾瀬地域が分離独立する際に、周辺地域と併せて指定されました。福島・群馬・新潟・栃木の4県にまたがる山岳地帯には、本州最大級の高層湿原・尾瀬ヶ原が広がり、燧ヶ岳や至仏山などの名峰がそびえます。雪解けとともに湿原一面に花々が咲き、四季折々の景観が人々を惹きつけてきました。木道や利用ルールの整備により、自然を守りながら楽しむ仕組みが築かれていることも、この公園ならではです。

尾瀬の周辺地域に暮らす人々や、山小屋・ガイド・保護団体など尾瀬を支える人々は、長い冬と短い夏、湿原や森が見せる繊細な変化を身近に感じながら過ごしてきました。自分たちが関わってきたこの場所を誇りに思い、未来のためにその魅力を伝え、傷つきやすい自然環境を守りつづけようと尽力しています。本誌では、尾瀬を愛してやまない人々の声を集めました。

『国立公園ものがたり』は、国立公園制度100周年となる2031年にかけて行う「国立公園制度100周年記念事業」の一つとして、日本のすべての国立公園において作成する聞き書き集です。この『国立公園ものがたり』を通して、地域の宝である国立公園の自然、その自然とともに生きてきた人々の歴史、文化、ストーリーを見つめ直し、次の世代、次の100年にしっかり引き継いでいただけることを願っています。

聞き書き集とは、話し手に自身の生き様を語ってもらい、その人の言葉をそのまま書き起こしてまとめたものです。口調や方言などもそのまま文章化することから、読み手は話し手の人柄や感情をリアルに感じ取ることができます。
地域の人が紡いできた国立公園のストーリーを、地域の言葉でお楽しみください。

目次

04 尾瀬国立公園
多様な魅力を持つ
山と水と花の楽園

08 ［聞き書き］平野太郎さん
「尾瀬の価値」を感じてくれる人たちと
持続可能な尾瀬観光を創っていきたい

12 ［聞き書き］宮澤公明さん
「自然を守る」は人間中心の考え方
現状を維持することが私たちの仕事

16 ［聞き書き］五十嵐寛明さん
自然の中に身を置くことは日常の一部
その延長線上に歩荷の仕事がある

20 ［聞き書き］館山美和さん
地域の「人の輪」を広げることで
尾瀬の魅力を次世代へつなぎたい

24 ［聞き書き］三橋一弘さん
自然にも、働く人にも優しい
そんな山小屋を次の世代に残したい

28 ［聞き書き］平野睦夫さん
愛情をこめて手入れをすることで
「天空の楽園」を未来へつなぐ

尾瀬国立公園

山、湿原、沼、そして生きものたち……。
さまざまな場面が木道でつながっている。
スマートフォンの画面には収まりきらない
圧倒的な風景が、ここにはあります。
尾瀬に暮らす人々は、この自然を守り、
次の世代へ手渡そうと今日も奮闘しています。
そんな人たちの声に、耳を傾けてみませんか？

多様な魅力を持つ
山と水と花の楽園

尾瀬国立公園の歴史は古く、1934 年に日光国立公園の一部として指定されました。その後 2007 年に日光国立公園から尾瀬地域が分割され、会津駒ヶ岳（あいづこまがたけ）、田代山（たしろやま）、帝釈山（たいしゃくさん）などの周辺地域を編入。29 番目の国立公園として新たに指定されました。本州最大の高層湿原である尾瀬ヶ原、噴火によって只見川源流部が堰き止められてできた尾瀬沼、これらを取り囲む至仏山（しぶつさん）、燧ヶ岳（ひうちがたけ）、会津駒ヶ岳、田代山、帝釈山といった山々が、尾瀬ならではの美しい景観を形づくっています。

指定年月日｜2007 年 8 月 30 日
面積｜3 万 7,222 ヘクタール
エリア｜福島県、栃木県、群馬県、新潟県

尾瀬国立公園の主要スポット

燧ヶ岳

東北以北最高峰の日本百名山

標高2,356メートル。至仏山とともに尾瀬を代表する東北以北最高峰の火山であり、日本百名山です。山頂からは尾瀬沼や尾瀬ヶ原を見渡すことができ、国内有数のブナ原生林が広がる山麓付近では、貴重な生態系が育まれています。

会津駒ヶ岳

山上の庭園が広がる南会津の名峰

標高2,133メートル。南会津を代表する日本百名山です。雪解け後には山頂付近に駒ノ大池が現れ、中門岳へと伸びる稜線には池塘（ちとう）が点在し、遠く広がる新潟や北関東の山並みと湿原の雄大な自然のコラボレーションが楽しめます。

尾瀬ヶ原

木道歩きを楽しむ尾瀬の象徴的風景

本州最大（東西6キロメートル、南北2キロメートル）の山岳湿地です。湿原には木道が整備され、5月下旬ごろのミズバショウ、7月中旬ごろのニッコウキスゲ、10月ごろの紅葉など、訪れる季節によってさまざまな景色を楽しむことができます。

至仏山

高山植物の宝庫

標高2,228メートル。尾瀬ヶ原西端に位置する日本百名山です。山体は蛇紋岩で、登山道沿いにはカトウハコベ、ホソバヒナウスユキソウ、オゼソウなどの希少な蛇紋岩植物が見られ、山頂付近からは尾瀬ヶ原が見渡せます。

田代山

空に浮かぶような山頂湿原

頂上部に展開する広大な田代山湿原では、ヒメシャクナゲ、ワタスゲ、チングルマ、キンコウカなど、季節の変化とともに多様な高山植物が花を咲かせます。山頂からは会津駒ヶ岳、燧ヶ岳などを望むことができます。

一般道

遊歩道・登山道

川

国立公園区域（陸域）

国立公園区域（湿原）

※国土地理院地図を元に加工

アヤメ平

キンコウカが彩る「天上の楽園」

アヤメ平は、尾瀬ヶ原南側の緩やかな尾根上に広がる湿原です。標高が高いため雪解けが遅く、花が短期間に集中して咲き、特に7月～8月に咲くキンコウカの群生は見事で、まさに「天上の楽園」といえます。

尾瀬沼

水面に映る「逆さ燧（ひうち）」が美しい

燧ヶ岳の噴火や山崩れによってできた堰止め湖です。針葉樹の森と小さな湿原が点在する湖畔は、尾瀬ヶ原同様に植物の宝庫となっています。周辺ではミズバショウやニッコウキスゲ、ヒオウギアヤメなどが見られます。

聞き書き
平野太郎さん

「尾瀬の価値」を感じてくれる人たちと持続可能な尾瀬観光を創っていきたい

尾瀬沼の東畔に建つ長蔵小屋は、1890年につくられ、現在まで130年以上、4代にわたって受け継がれている歴史のある山小屋です。かつて年間60万人を数えた尾瀬の入山者は、現在では約17万人と減少していますが、近年、新たなファンを獲得しつつあります。2024年からは「株式会社ほぼ日」とのパートナーシップを開始し、長蔵小屋は新たな時代へと歩み始めました。4代目主人の平野太郎さんに、自然環境保全と観光の両立、そして今後の可能性について、お話をうかがいました。

ひらの・たろう／1968年生まれ。群馬県沼田市出身、片品村育ち。幼少期から高校時代まで、山小屋シーズンは家族とともに尾瀬で過ごす。北海道大学工学部卒業後、千代田化工建設勤務を経て、1997年に長蔵小屋入社。オーバーユースの問題やコロナ禍のなかで、尾瀬の自然保護と入山者を迎え入れる環境整備の両立を模索しつづけてきた。2024年からは株式会社ほぼ日とのパートナーシップを開始。「新たな時代の尾瀬観光」に向けた取り組みを進めている。

尾瀬の象徴・長蔵小屋の4代目として生まれて

長蔵小屋の歴史は1890年、平野長蔵が19歳のときに燧ヶ岳の開山で入ったのが始まりです。長蔵が最初に山小屋を建てたのは、尾瀬沼の対岸（西岸）にある沼尻でした。燧ヶ岳の麓に鳥居をつくって、山頂に石の祠を担ぎ上げ、お参りして、生活する。当時は登山客を迎える山小屋としてではなく、山を神として信仰し、自然から学び、人間生活を豊かにしていきたいという理想を持った人たちが集う場として建てたんです。長蔵は「大自然の恩恵の下に集まりて、この大自然の美を享受せよ」という言葉を残しているんですけど、貧しい時代にあっても、多くの人々に自然の豊かさを感じてほしい、という思いで宿泊施設を始めたわけです。

現在の尾瀬沼東岸に移ってきたのは1915年です。沼尻のほうはちょっと水が細かったみたいですね。その点、ここは山からの湧き水が豊富だし、沼田街道沿いですので人の往来や馬での物資輸送にも便利でした。そんなことから移転してきたと聞いています。その後、大正時代後期に尾瀬沼のダム化計画が持ち上がると、長蔵はその計画を阻止しようと奔走しました。また、2代目の長英（ちょうえい）、3代目の長靖（ちょうせい）の時代にも、尾瀬沼は取水計画や自動車道建設計画など、さまざまな自然破壊の危機にさらされてきたんですが、そのたびに反対運動などを行ってきました。

私は4代目にあたります。父の長靖は私が3歳のときに亡くなったので、こうした活動についてはっきり覚えてはいないんですけど、そのころの雰囲気は、子供ながらに感じていました。

生家は片品村の戸倉です。保育園から小学校時代には、夏休みの間はこの小屋が「家族の生活の場」でしたから、当然のように尾瀬で過ごしました。中学生になると、学費を稼ぐために、アルバイトの人たちと一緒に、食事の準備や片付け、掃除、ときには軽く歩荷（ぼっか）の仕事をしたりと、がっちり働いてました。当時はお客さんも今よりずっと多かったし、働いている人も多かったので賑やかでした。

高校時代は沼田で下宿をしながら通学しました。部活は水泳部。といっても、大会で高成績を目指すというのではなく、健康維持のためというか、そんなところです。「山とは違う世界のことをやってみたい」というのもあったんです。

卒業後は、北海道大学の工学部に進みました。もともと農学系を目指していたんですけど、当時、学部を選ぶ際に成績が勘案されたんで、残念ながら農学部には行けなかったんです。それで、工学部の衛生工学科に進みました。今で言う「環境工学」みたいな学問分野で、もともと興味のある分野でした。

大学時代は、仲間と一緒に大雪山や近くの山に登ってました。北海道って、尾瀬とよく似てるんです。標高は高くないけど緯度が高いから気候的にも近いですし、札幌近郊なんか本当に尾瀬と変わらない感じでした。低山でも楽しめるフィールドがたくさんあるので、私にとっては過ごしやすかったです。

大学卒業後は、社会経験を積みたいという思いもあって、東京の会社でエンジニアとして働いてました。石油化学コンビナートを作ったりメンテナンスしたり、いわゆるプラント会社です。勤めていたのは6年間なんですけど、この間は、連休のときに、たまに帰省する以外は、ほとんど帰ってくることはなかったですね。

長蔵小屋を継ぐことは、大学進学前には決めてました。父の死後は母が中心となって小屋を切り盛りしてたので母の年齢のこともありますし、山小屋の仕事には体力も必要ですから、自分自身のことを考えても、ある程度若いうちに入っておきたいと思っていたんです。当時、会社で携わっていた仕事は一つのプロジェクトに2年、3年かかりますので、20代も半ばになると、常に心のどこかに焦燥

別館。1階の喫茶室では、コーヒーやハーブティー、ピザなどを楽しむことができる。

1934年に建てられた歴史ある木造の建物。尾瀬沼周遊や燧ヶ岳登山で多くの方に利用される。

小屋の前には湧き水が。登山客の多くがここで水筒を取り出し、水をくんでいく。

平野家の墓所がある「ヤナギランの丘」を指さす平野太郎さん。

感を抱えていましたね。30歳を超えると会社からの期待も大きくなって、より辞めにくくなってしまう……そう考えて、30歳直前で退職を決断したんです。

自然保護と山小屋経営の両立にプレッシャーを感じる日々

私が小屋を継いだのは1997年のことです。尾瀬の入山者数は約60万人、オーバーユースの問題がメディアでよく取り上げられていたころで、木道に行列ができて時間どおり進めない、植物も観察できない、トイレも混んでいて20分待たないと入れない、というような映像が流れていました。しかし実情は、混雑する場所は「鳩待峠～山ノ鼻」というメインルートの入口だけ。しかもほとんどは日帰りの登山客というのが実情で、小屋自体はそこまで混雑した状態ではありませんでした。

私が高校生だった1985年ごろは、1日に500～600人ぐらい受け入れていた小屋もあったので「1畳2人」なんていうときもありました。けど、長蔵小屋は尾瀬ではいち早く定員制を導入して「1畳1人」と定めてましたから、一定のキャパシティ以上にはならなかったんです。まあ、現在は定員が「3畳1人」になってますから、それを考えれば多かったとは思いますけど。

また、当時は北アルプスのガイドブックを見ると、「1畳3人の寝方」みたいなマニュアルが載ってたんですよ。「足と頭の向きを互い違いにして、上を向かないように」とか、「夜中トイレに行って帰ってくると、もう場所はないので気をつけるように」って書いてあったんです。私自身も体験したことがあります。コロナ禍以降は北アルプスも定員を減らしていますけど、尾瀬はもっと早くから着手してたんです。

1998年以降、尾瀬の入山者は減少傾向をたどり、コロナ禍もあって今は20万人を割っています。尾瀬って、「自然保護の聖地」というイメージが独り歩きしてしまったために、積極的な集客プロモーションができなくなってしまったんです。実際、お客さんが減ってからも「オーバーユース」という言葉を枕詞のように語られることが多かったんです。その結果として、旅行会社のパンフレットやツアー企画でお客さんが尾瀬という地名を目にする機会が少なくなっていったんですね。日本の自然観光で言えば、富士山や上高地、南アルプス、八ヶ岳など、魅力的な観光地がたくさんあります。こうした地域は、県を挙げてコツコツとキャンペーンを打ったりして魅力発信をしてますから、一般の方が目にする機会も多いと思うんですけど、尾瀬の場合、そのような発信がやりにくかったんですね。

とはいえ、やっぱり山小屋を維持していくには、ある程度のお客さんがいて収入がないと、人も雇えないですし、登山道の整備もままなりません。尾瀬の自然保護と入山者を迎え入れる環境整備を両立させていくためには、山小屋の健全経営が欠かせないんです。特に長蔵小屋は「尾瀬の環境保護のシンボル」みたいな小屋ですから、常にプレッシャーは感じてましたね。

「守りながら開く」観光へ尾瀬の新たな時代が始まった

2024年から、コピーライターの糸井重里さんが代表を務める「株式会社ほぼ日」とのパートナーシップを始めたのは、そんな問題意識があったからなんです。「ほぼ日」というサイトを運営されていて、発信力の強い会社なんです。

山小屋の運営は人手がかかる仕事です。どうしても住み込みになりますから、なかなか働き手が集まらないんです。昔は長く働いてくれる地元の人たちがいたんですけど、皆さん高齢になられて、どんどん辞めていくような形で。以前は、沼尻にある休憩所もうちで運営してたんですけど、人手が足りなくて年々細る一方で……。ただ、そうは言っても「短期のアルバイトで当面の人手不足を補いたい」というわけではありませんでした。やっぱり「尾瀬という場所」や「長蔵小屋」に価値を感じて、長い目で関わってくれる人を増やしたかったんです。いよいよ個人の力だけでは限界を感じて、知り合いにも声をかけてつてをたどっていたところ、幸いにも、ほぼ日さんに行き着いたというわけです。

現在は、ほぼ日さんが立ち上げた「尾瀬とほぼ日」というサイトを見て集まったメンバーの人たちに、長蔵小屋本館の中にある「本館売店」と、隣接する日帰り客向けの「ビジター売店」の企画・運営をやってもらっています。また、尾瀬に興味のある人たちが集まる「ほぼ日　尾瀬の会」というコミュニティを通じて、新たなファン開拓もやっていただいているんです。まだ一緒に走り出したばかりで、「今後、どんなことができるかなぁ」って相談している段階ですけど、私としては非常に心強いし、どんな新しいアイデアが出てくるのかワクワクしています。

売店には、マップ、バンダナ、手ぬぐいなど、従業員のアイデアを生かした商品も。

最近では、こうした発信によって、これまで尾瀬のことを知らなかった若い人たちが尾瀬の魅力に気付きはじめてくれています。昔のように団体じゃなく、個人やグループで、思い思いの楽しみ方を発見して楽しんでくれているという印象ですね。

インバウンド（訪日外国人旅行者）のお客さんも増えていて、団体のお客さんといえば韓国や台湾の方がほとんどです。なかには何度も来ている方もいらっしゃるし、みなさん、本当に日本の自然環境が大好きで、すごく楽しんでくれているなと感じます。

SNSでも「実際に来てみたら、ぜんぜん混雑してないよね」とか、「思ったより魅力的だし、来やすいところだよね」なんてコメントを目にすることも増えてきました。鳩待峠には新しいホテルもオープンして話題になりました。

先ほど、「大自然の恩恵の下に集まりて、この大自然の美を享受せよ」という長蔵の言葉を紹介しましたけど、やっぱり人間にとって、自然環境の大切さを感じられる場所は必要不可欠だと思います。今はテクノロジーが進化していますから、スマホを使ってバーチャルに大自然を経験することもできるのかもしれませんが、やっぱり五感を研ぎ澄まして雄大な風景や美しい植物、季節の移ろいをリアルに体感することによって、「大自然の美を享受する」ことができると思うんです。

人間が日々生活しているなかでは、仕事や人間関係でストレスを感じたり、忙しさのなかで自分を見失ってしまうこともあります。でも、雄大な自然の中に身を置くと、そういうものがちっぽけに感じられます。自然には、そういう意味合いがあると思っています。地球上に生きとし生けるものの一員として人間が関わっている、ということを感じられる場所だと思うんです。

私自身の「お気に入りの場所」は、平野家の墓。大江湿原の北側の「ヤナギランの丘」と呼ばれている場所にあって、朝晩に足を運ぶんですけど、そこは湿原、湖、燧ヶ岳、周りの木々が一つのアングルで目に入ってくるところなんです。水鳥がいて、夏はトンボがたくさん飛んでいて。その風景を眺めていると、豊かさを感じますね。まさに「人間にとって必要なものはここにある」という感じです。

あと、「時間の濃度」も尾瀬の魅力です。5月に早春の山に入り、短い夏が終わって10月の声を聞くと、あわただしく冬の準備が始まる……半年の間に四季が凝縮されてる感じなんです。春先はまた感動的で、雪解けとともにさまざまな生き物が活動を始めるのを感じられます。「ただ生きているだけ」なんですけど、そこに生命の豊かさを感じますね。

今では、観光戦略としても「守りながら開く」という方向に変わりつつあります。こんなふうにポジティブな発信が増えていくことで、尾瀬が、旅先を選ぶ際の一つの選択肢になればいいなと思っています。

大江湿原から尾瀬沼方面を望む。7月下旬にはニッコウキスゲの群落が見られる。

聞き書き
宮澤公明さん

「自然を守る」は人間中心の考え方
現状を維持することが私たちの仕事

尾瀬国立公園は日本を代表する湿原地帯として知られ、その豊かな自然環境と多様な植物相から多くの観光客を魅了してきました。しかし、1960年代には、貴重な湿原が踏み荒らされ、植生の回復が大きな課題となりました。宮澤公明さんは、約20年にわたってアヤメ平の植生復元や木道整備に携わってきました。現場主義を貫き、自らの仕事を「尾瀬の雑用係」と称する宮澤さんに、これまでの仕事に込めた思いと、尾瀬の魅力についてお話をうかがいました。

みやざわ・きみあき／1965年生まれ。群馬県沼田市出身。東京パワーテクノロジー株式会社（TPT）尾瀬林業事業所環境保全グループ所属。大学時代に火山の研究に携わり、卒業後は書店勤務を経て、山での仕事を求めて尾瀬林業に入社。当初は山小屋の営業や管理を担当し、その後、尾瀬の植生回復や木道管理などの現場作業に従事。尾瀬の自然に対する愛着と理解を持ち、特に小さな花やあまり目立たない植物に関心を寄せている。

「静かなところで働きたい」知人の紹介で尾瀬の仕事に

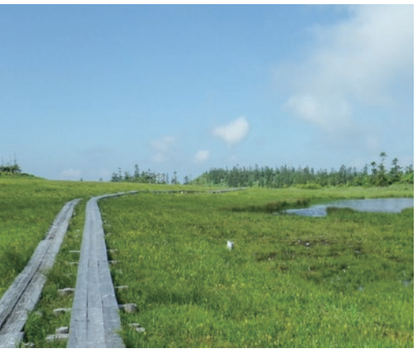
生まれは群馬県沼田市です。私が小さいころ、親が科学マンガを買ってくれたんですね。そこに地球の話が載っていて、それがきっかけで火山に興味を持ち、高校時代には地学部に入って火山の勉強をしていました。その後、横浜の関東学院大学に進んで勉強を続けたんですが、大学時代はもっぱら映画を観たり、自主映画を撮ったりしていましたね。

大学卒業後は書店に勤めたんですけど、1年もたたずに辞めました。万引きが多かったんですよね。ある日、捕まえたのが幼稚園の先生で、子供をおとりに使って万引きしてたんです。大ショックでしたね。で、なんのために働いているのかわからなくなって……。

そのころ、知人に「尾瀬でゴミ拾いの仕事でもしたいなぁ」ってこぼしたらしいんです。自分でもなんでそんなこと言ったのか覚えてないんですけど、静かなところで働きたいと思ったのかもしれません。そしたらその友人が、尾瀬林業という会社を紹介してくれたんです。もともとは東京電力の関連会社で、尾瀬地域の東電所有地の管理・自然環境保全を主な業務とする会社でした。その後、東電に吸収合併されて現在に至っています。

入社当時は、山小屋関係の仕事をしてました。山小屋に勤務したり、営業といって、会社で宿泊の受付をしたり、必要な物資を注文して小屋まで運んだりと、そんな感じの仕事です。当時は、納品が遅れてベテランの従業員さんたちに「遅い！」とか「もっと頭使え！」って怒鳴られてました。もっとも、真面目にやっていればすごく面倒見てくれる人たちなので、私が不真面目だっただけなんですけど。このときの経験が、今も仕事をするうえで糧になってますね。

その後は、現在の一ノ瀬バス停にあった休憩所の管理人を皮切りに、尾瀬沼山荘や鳩待山荘の支配人としてシーズンの間、常駐する仕事を9年間やってました。もともと愛想のない人間なんで、よくお客さんに怒られましたね（笑）。その後、本社勤務を経て、現在の環境保全グループに異動になったんです。



1960年代の荒廃したアヤメ平（写真上）と、植生復元によってよみがえった現在の姿。
写真提供／東京パワーテクノロジー

アヤメ平の植生復元に取り組んできた20年間

尾瀬と東京電力のつながりは、東京電力の設立時から始まります。明治から大正にかけて人々の生活に電気が入りはじめて電力需要が増すと、水力発電所をつくることが国家課題となりました。そこで大正時代に、当時の電力会社が、尾瀬の豊富な水を発電に生かそうと、土地と水を利用する権利を取得したんです。そして、東京電力が設立された1951年に、その権利が引き継がれた……。これが尾瀬と東電の出会いになります。

今、尾瀬国立公園全体の約4割、特別保護地区の約7割が東京電力の土地なんですよ。

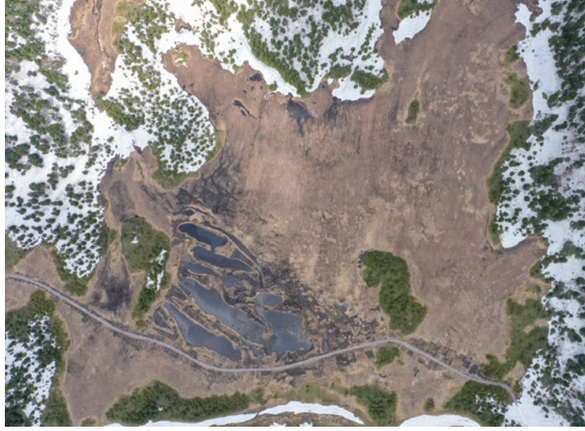
その後、1960年代になると、空前の尾瀬ブームが訪れます。今では信じられないような話ですけど、当時は木道が整備されてなかったですから、訪れたハイカーたちは湿原のなかを自由に歩き回ってたんです。踏み荒らされた場所がぬかるみになると、人がぬかるみを避けて湿原の中を歩く……この悪循環が繰り返されることで、裸地が拡大していきました。さらに、裸地になったところに雨が降ると泥炭が流出してしまって、植物が生育するのがいっそう難しい状況となりました。

こうして、かつて「天上の楽園」と呼ばれていたアヤメ平湿原はすっかり裸地になってしまったんです。その面積は約1・2ヘクタール。尾瀬地域でもっとも広い裸地となりました。そこで、1966年に群馬県によって植生復元が始められ、1969年からは尾瀬林業が主導してきました。

植生復元は、まず、人が足を踏み入れないように木道を敷いた後、年間320平方メートルずつ回復作業地を定めて、ミタケスゲという植物の種子をまきました。このミタケスゲがなんでいいかって言うと、発芽率が非常に高いんです。こうした復元作業を約40年間続けたことによって、2008年には、9割方は緑が回復しました。私がアヤメ平の植生回復に携わるようになったのは20年前ですから、ちょうどこの時期にあたります。

先輩方の努力で9割は回復しましたけど、残りの1割がどうしてもうまくいかない。その原因は、ミタケスゲの「湿気に弱い」という性質にありました。ミタケスゲは乾燥した

植生復元の作業は、現在も続けられている（写真は2008年の作業のようす）。
写真提供／東京パワーテクノロジー



ドローンで上空から撮影したアヤメ平（2020年撮影）。
写真提供／東京パワーテクノロジー

場所ではうまく発芽してくれるんですけど、ちょっと水がかぶると芽が出ないんです。それじゃ種を変えてみようということで、その後は1年に30～40平方メートルのエリアを定めて、毎年、試行錯誤を繰り返しています。具体的には、比較的湿気に強いヤチカワズスゲとかミヤマイヌノハナヒゲなどの種をまいて、近くに自生しているミズゴケなどのコケ類を採取して種の上に散布するんです。コケを散布すると、地面にカーペット状に広がって、植物の種が湿原に定着しやすくなります。さらに、その上からアヤメ平で自生しているヌマガヤの葉を刈り取ってかぶせます。こうすることで雨風によって種が流されるのを防いでくれるんです。こうした手法を試しながら、発芽率を観察しています。

尾瀬は冬の間、雪に覆われますから、半年間はなにもできないんですよね。今年まいた種が、来年どうなっているかを観察して、その後の方法を検討する……このサイクルを繰り返していきます。近年はゲリラ豪雨など気候変動の影響もあって、従来のやり方ではうまくいかないケースも増えてきました。今後は、専門家の知見も生かしながら、変化が大きな状況にフィットした方法を模索していくことになります。

自然には、もともと備わった治癒力・回復力がありますから、われわれはそのお手伝いをするっていう感じですね。だから後輩たちに、「自分たちの仕事は、『自然を守ること』じゃなくて『現状維持を目指すこと・これ以上傷口を広げないこと』なんだ」って言ってるんです。だって、守るなんて言うと、いかにも人間優位な感じがしますよね。そうじゃなくて「ここはどうして植物が根付かないんだろう？」っていう想像力や、台風や大雪など天災について正しく畏れるという自然に対する謙虚さが大切なんだと思います。

かつて湿原を踏み荒らした人たちだって、けっして環境を破壊したかったわけじゃないですよね。今のように木道も整備されてなかったし、人々のマナーも確立されていなかっただけなんです。だからこそ、初めて来る人たちには、過去にこんなことがあったんだと知ってもらうことが大切だと思うんです。そこで、アヤメ平の入口に掲示板を設置したり、東京電力のホームページで、湿原の荒廃から回復までの道のりを写真で紹介するなどのPRも行っています。

「尾瀬の雑用係」の知識や経験を後輩たちに継承するのが仕事

尾瀬の象徴ともいうべき木道の整備もわれわれの仕事です。木道は尾瀬のほぼ全域の湿原や山間部に設置されていて、東電が設置したものだけでなく環境省が設置したものも一部整備しています。

木道の寿命は、場所にもよりますけど、平均すると10年前後。鳩待峠から山ノ鼻の間、山ノ鼻から龍宮小屋の間なんかは、歩く人が多いので傷みが早くて、だいたい7年～8年で交換ですね。さらに、大雨とか台風が来ると、流されたりして傷みが早くなります。

木道に使うカラマツは、東電が所有している林から切り出します。車道に搬出しやすいところから切って、5年～6年のサイクルで移動してきたんですけど、そろそろ車道から切り出せる林がなくなりつつあります。今後は皆伐して新たに植えるようなサイクルに変えていかないとダメなのかもしれませんね。

ほかにも、登山道に倒れかかってきた木や、倒れそうで危険な木を撤去したり、木道上に滑り止めのために打ち付けてある「桟木（さんぎ）」の補修を行ったりしています。補修作業をしていると、ハイカーの方からねぎらいの言葉をかけていただくこともあるんです。今年の夏は女性の方から「ご苦労さま、暑いなか大変ですね」って、梅味のアメを頂きました。老朽化して壊れかけた木道が補修作業によって歩けるようになると、自己満足ですけどうれしいですよね。

最近では、資金や人手の不足などもあって、なるべく工作物を設置しない方向にシフトしてきています。たとえば尾瀬ヶ原なんかは歩く人が多いので、歩く場所を限定する意味でも木道は有効ですけど、至仏山や三平峠みたいにあんまり人が行かないところは、木道を入れると後々の管理が大変なんで置かないほうがいいとか、メリハリをつけて整備するようになってきてますね。

また、尾瀬ガイド協会などが中心となって、倒木や石といった周囲にある材料を使って登山道を歩きやすくするとともに、生態系の復元にもつながる「近自然工法」といった整備方法も取り入れられるようになりました。今後は、木道・登山道の整備と自然の維持管理をいかに両立させるか、というのが大きなテーマですね。

木道に使われている材木には、施工した年が焼印で記されている。

私自身は、尾瀬の植生も風景もすべてが好きなんですけど、火山好きとして言うなら、新旧さまざまな火山が周りにあって、あれほど多種多様な花や水ゴケが見られる場所はなかなかないので、そういうところに魅力を感じます。だから、尾瀬を訪れる人たちには、ミズバショウやニッコウキスゲだけじゃなくて、ぜひ「小さい花」も見てもらいたいんです。見晴から温泉小屋に向かう木道脇で見られる柿色のカキラン、水面から花茎を伸ばして黄色い花を咲かせるコタヌキモ、花弁が巴形にねじれているトモエソウ、ほかにもオゼソウとかミヤマムラサキなど、よそではなかなか見られない貴重な花が咲いていますから、事前に図鑑なんかで調べて、探してみると楽しいと思いますよ。

今年60歳を迎え、これから定年までの5年間は、これまで身につけた知識や経験を後輩たちに伝えることが、私に与えられた仕事だと思っています。

伝えたいのは、これまで行ってきた作業の経緯です。アヤメ平の植生復元にしても木道整備にしても、私たちが先輩から受け継ぎ、試行錯誤を繰り返すなかで、うまくいった方法もあれば失敗した方法もある。その過程を経て今の状態があるんだよということを知ってほしいんです。植物の知識は専門家の人にはかなわないですけど、これからチャレンジしようとしていることが本当に有効なのかどうかは、これまでの経緯を知っていないとわからないですからね。

そのためにも、若い人たちには、もっと現場に足を運んでもらいたいと思っています。私なんかは木道を歩くときに、前回通ったときと違ってるところがないかを観察して、「ここは以前よりぬかるんでるな」とか「木道の桟木が壊れかけてるな」って下ばっかり見て歩くんですけど、そういう歩き方ができなくなっている人が多いように感じます。われわれの仕事って「尾瀬の雑用係」なんですよ。私らが小学生の頃は、学校に用務員さんっていたじゃないですか。学校の隅々まで目配りして、ちょっとした異変を見つけたら、すぐに対処してトラブルを未然に防ぐ……そんな存在が望ましいのではないかと思うんです。

私は、この仕事に出会えたおかげで体力も維持できたと思っています。ただ、後輩たちには冗談で「いつまでこき使うんだ」って言ってます。そのたびに無視されてますけどね（笑）。

「小さな花が好き」という宮澤さん。フィールドでは常に植物図鑑を携えている。

木道の桟木を補修する宮澤さん。こうした地道な作業が登山者の安全を守っている。

聞き書き
五十嵐寛明さん

自然の中に身を置くことは日常の一部
その延長線上に歩荷の仕事がある

食料や飲料、生活用品、燃料などを背負って山小屋に届けるのが歩荷（ぼつか）という仕事。木道を歩く歩荷さんの姿は、尾瀬の風物詩ともいうべき存在です。五十嵐さんは21歳でこの仕事と出会い、今年で29年目。多いときには100キログラムを超える荷物を背負って山道を歩く過酷な仕事ですが、「歩荷を辞めたいと思ったことはない。それよりも尾瀬を歩ける喜びのほうが大きい」と語ります。そんな五十嵐さんに、歩荷という仕事、尾瀬の魅力についてお話をうかがいました。

いがらし・ひろあき／1976年生まれ。福島県大沼郡新鶴村（現・会津美里町）出身。山小屋のアルバイトを経て歩荷の仕事と出会う。同じく山小屋のアルバイトをしていた妻・のぞみさんと結婚し、2人の子供とともに片品村で暮らす。山小屋が営業する4月下旬～10月下旬までは歩荷として働き、冬の間は酒造会社で蔵人の仕事や山小屋の除雪作業などをしている。尾瀬の歩荷仲間とともに、株式会社歩荷隊として他地域の荷揚げなどを手伝うことも。

木道を歩く五十嵐さん。背負い梯子の肩当ては好みに合わせて自作するという。

「自然の中を歩く仕事がしたい」と歩荷の道へ

生まれは福島県会津の新鶴村というところです。小・中学校は新鶴村で、高校は喜多方高校に進学しました。自宅から高校までは片道20キロぐらいあるんですけど、雨の日も雪の日も自転車で通ってました。会津は地吹雪がすごいんで、冬場は学校に着くころには服がバキバキに凍った状態でしたね。

それでも3年間、1日も休みませんでした。僕は全校生徒のなかで一番遠いとこから自転車で通ってたんです。しかも高校生なんて一番サボりたい時期じゃないですか。だから勝手に「俺の皆勤には価値があるんじゃないか？」って思い始めて、目標にしてました。この自転車通学で、体力と忍耐力が鍛えられたのかもしれませんね。

尾瀬との出会いは、小学生のときに親に連れられて来たのが最初です。尾瀬ヶ原のほうではなくて尾瀬沼側なんですけど、燧ヶ岳に登って泊まったっていう記憶が最初ですかね。尾瀬に特別な思いがあったというよりは、自然の中で遊ぶことが楽しかったんですね。夏は雑木林へ虫とりに行ったり、川で魚釣ったりして遊んでました。

高校で山岳部に入っていたこともあって、卒業後、尾瀬の山小屋で住み込みのアルバイトを始めました。大学受験に失敗して「これからどうするかな？」って考えたとき、また来年受験するにしても、予備校行くにしても、とりあえずお金を貯めないと、と思って。そんなとき、山の雑誌を眺めてたら、山小屋の求人がいっぱい載ってたんです。「尾瀬なら行ったことあるし、ちょっと行ってみようかな」って。そんな軽い気持ちから、至仏山荘でアルバイトすることになったんです。

当時は尾瀬ブームで、観光客の数がすごかったですね。2025年は17万人とか言われてますけど、そのときは66万人ぐらい。毎日、ほんとに忙しかったですね。せっかく尾瀬に来たのに、外へ出る機会もありませんでした。そんなとき、荷物を背負って黙々と山を歩く歩荷さんたちの姿を見て「自分も自然の中を歩く仕事がしたい」と思ったんです。

至仏山荘は、歩荷さんたちがコーヒーを飲みながら休憩して、またそれぞれのルートへ出発していく拠点でした。その日の帰りに、小屋を出ていく歩荷さんたちの背中が「今日もやり切ったな」みたいな雰囲気を出してて、かっこよかったんですよね。

でも、そのときは人数が足りてる感じで、「来年、1人辞める予定なんで、来年来ればできるよ」って言われて、翌年の春にまた尾瀬に来たんですけど、誰も辞めてなかったんですよね。で、もう1年、山荘で働くことにしたんですけど、その次の年にようやく採用されたんです。辞めた人は僕と体形がまったく一緒だったんで、その人から背負い梯子（はしご）とか靴とかジャージとか、必要な道具を譲り受けて、憧れの歩荷人生が始まりました。

尾瀬の歩荷は、バランスが命「おんぶ」より「肩車」の感覚

尾瀬の歩荷には元締めと呼ばれる人がいて、山小屋と契約して歩荷に仕事を振り分けています。日当は、荷物の重量と歩く距離で決まります。たとえば山ノ鼻地区までなら重量単価がいくら、見晴地区だと距離が倍ぐらいあるんで、単価も倍ぐらいになる。だから、毎朝、荷物を背負う前に、その日の日当がわかるんです。

荷物の重さは平均で70～80キロぐらいかな。近くの小屋までなら100キロを超える場合もあります。でも、やっぱり毎日背負うんで、コンスタントに一定の重さを保っているほうがいいんですよね。頑張って90キロ背負っても、次の日に疲れが残ったり体を痛めたりすると、小屋にも迷惑がかかるんで。

尾瀬の歩荷は、長い背負い梯子が特徴なんです。荷物がいっぱいつけられるように長く作ってあるんですけど、あれだけの長さは日本でも尾瀬だけじゃないかな。ほかの山だと登山道の頭上に枝が茂ってるから、あんな長いのは邪魔ですもんね。

歩荷っていうと、力で担ぐようなイメージですけど、尾瀬の場合はバランスが重要で、後頭部から肩の裏あたりに重心を持ってくるやり方なんです。「おんぶ」じゃなくて「肩車」に近い感じです。立ち上がるときも、荷物をゆっくり前に倒しながら、自分の体の軸に重

ベンチで休憩。「おんぶじゃなくて肩車」という言葉の意味がよくわかる。

鳩待峠で出発前の荷造り。この日の荷物は約 70 キロ。

心が乗ったタイミングで立ち上がるんです。朝、最初に立ち上がるときに荷物のバランスがドンピシャで決まると、80キロぐらいの荷物でも、「体感ゼロ」に感じるんですよね。そんな日は、スタートして5分ぐらいで「もうゴールが見えたな」みたいな気分になります。

背負い梯子には腰ベルトもついていないんで、バランス感覚を身につけるまでに時間がかかります。自分も2年目ぐらいまでは感覚がつかめなくて、何回荷物を倒したかわかりません。バランスがとれないまま歩くと体へのダメージも大きいので、仕事を終えると足を引きずりながら帰る毎日でした。帰宅したらすぐにアイシングや柔軟体操をして、翌朝も、6時出発だとしたら4時か5時には起きてストレッチをしないと不安でした。腕の組み方はどうしたらいいのか、重心はどの高さにしたらいいのかって、毎日歩きながら試行錯誤を繰り返しました。3年目ぐらいでようやく痛みがなくなって、初めて歩荷の仕事を楽しめるようになりましたね。

現在は片品村で、妻と2人の子供と暮らしてます。初めはアパート暮らしだったんですけど、結婚して長男が生まれたのを機に中古の家を買いました。

うちの妻も、2年間ですけど歩荷をやってた時期があるんです。僕と同様、もともとは山小屋でアルバイトをしてたんですけど、入って1ヶ月ぐらいたったころ、突然、「背負子（しょいこ）を背負わせてください」って言ってきたんです。「変わった子だなぁ」と思ったんだけど、試しに30キロぐらい背負わせてみたら「やっぱり本格的に歩荷をやりたい」って言うんですよ。小屋主たちからは「男でも大変な仕事なのに女の子じゃ無理だ」って猛反対を受けたんですけど、本人はもう「やりたい」の一点張りでした。だったらやらしてみて、自分で「やっぱり無理だった」と納得して辞める分には、そっちのほうがいいんじゃないかってことで、歩荷仲間に加わったんです。そしたら思いのほかハマって、本人も「楽しい」って言うんですよ。結局は、おまけみたいな感じじゃなくて、普通のローテーションに入って2年間やってましたね。子供は、男の子が2人。子供たちが小さいころは、毎年1回〜2回は尾瀬に連れて行ってました。今、上の子は尾瀬高校の自然環境科1年生。実習が多くて、尾瀬に来てシカの生息数を数えたり、シカよけのネットを張る手伝いをするみたいです。下の子は小学3年生ですけど、天気が良ければずっと虫とりっていう感じですね。

僕の場合、子供の頃から自然が近くにあるのが当たり前で、その延長線上に歩荷という仕事がありました。だから、家を出るときに気合い入れて「お父さん仕事行ってくるぞ」みたいな感覚はなくて、「ちょっとそのへん行ってくる」ぐらいの感じですね。帰ってきたときも「今日も背負ってきたぞ」みたいな感じは出さないです。ほんとに日常の場面の一つみたいな感じです。だから子供たちも「歩荷って大変だな」なんて思ってないと思いますよ。「今日どこ行ってきたの?」「歩荷してきたよ」って感じですね（笑）。

最近、若い仲間が、動画配信で歩荷の仕事を広めようと頑張ってくれてるんです。もともとは、三平峠の木道がひどく傷んでて、でもお金がなくて直せないから何年もボロボロのままだったんです。そこで仲間の1人が「クラウドファンディングやってお金を集めて木道を直すんだ」って動画配信を始めたんですよね。その結果、多くの寄付が集まって木道整備ができました。その後も動画配信は続けてくれていて、動画を通じて「尾瀬の魅力」とか「歩荷という仕事」を知ってくれる人が増えてきたんです。

クラウドファンディングで修繕された木道には、プレートが取り付けられている。

その効果なのかどうかわからないけど「歩荷をやってみたい」っていう子はちょこちょこ来ますね。今年も1人、9月の末ぐらいに突然来たんです。東京の多摩から自転車に乗って鳩待峠まで上がってきて、いきなり「歩荷やりたいです」って。ちょうど紅葉シーズンで忙しくなる直前だったんで、メンバーに加わってもらいました。せっかく「やりたい」って思ってくれる人がいるんだったら、ぜひやらせてあげたいですもんね。

29年間、歩きつづけてきて感じる尾瀬の変化

歩荷の仕事を始めて今年で29年目。その間に尾瀬もだいぶ変わってきましたね。

自然環境という点では、シカの食害でニッコウキスゲがものすごく減ってるんですよ。そのため、数年前からは、芽やつぼみを食べられないようにネットを張って保護しています。そうすると、花が咲いた後に種を落とせるんですよね。最近はその効果もあって、だいぶ回復はしてきてるんですけど。

お客さんの数も、僕が来たころよりはだいぶ減ってますね。もともとは多すぎる観光客を減らすためにいろいろ対策したからでもあるんですけど、バスやタクシーの料金や駐車料金が高くなって人が来なくなったら、山小屋を経営してる人からすれば、やっていけなくなっちゃいますよね。結果的には歩荷の仕事にも影響が出てくるのかもしれません。ただ、個人的には「せっかく尾瀬に来てくれたんだから、のんびり楽しんでほしい」という気持ちもあります。昔は、きれいな花を見つけてカメラを取り出したくても、後ろから来る人に急かされるし、休憩したいと思ってもベンチが埋まってるから歩くしかない……みたいな感じでしたからね。その点、今は、週末はちょっと混むけど、平日はゆったり歩けるんで、今ぐらいがちょうどいいかなぁとも思うんですけどね。

池塘が点在する湿原の間を木道が延びる。歩荷の姿は、尾瀬を象徴する風景の一つ。

最近は、若い人たちが増えてますね。昔は、若者といえば山岳部の学生で、あとは年配の人、ってイメージだったんですけど、山ガールとかキャンプブームの影響で、だいぶ若い人が増えました。海外の人も増えましたね。特に韓国の人たちがすごく増えてます。韓国で2021年に上映された『幸福の速度』っていう映画があって、それを見た人たちが尾瀬を訪れてるみたいです。僕と、石高くんっていう若い歩荷の2人が主人公で、歩荷の暮らしを追ったドキュメンタリーなんですけど、みんな僕らを見かけると、「映画を見て来ました」って声をかけてくれるんです。

尾瀬の魅力ですか？　自然や景観が多彩なところですかね。尾瀬というと尾瀬ヶ原をイメージする人が多いと思うんですけど、至仏山と燧ヶ岳という大きな山があって、尾瀬沼があって、「天上の楽園」と呼ばれるアヤメ平があって、三条の滝っていう100メートル近い落差の滝もある。毎日歩いていても、本当に飽きないんです。生き物がいっぱいいて、植物も花も豊富だし……。そんな場所を毎日歩いて、季節の移ろいを感じながら仕事ができるっていうのは、最高に幸せですね。

クラウドファンディングによって、「三平峠〜三平下」区間の木道が歩きやすく修繕された。

自然ももちろんですけど、小屋の人たちとのコミュニケーションだったり、お客さんとの触れ合いだったり、いろんな出会いがあるのも魅力です。はたから見ると、同じことの繰り返しみたいに見えるかもしれませんけど、毎日、なにかしらドラマがあるんです。「今日はなにが起こるんかなぁ」ってワクワクするんですよね。

だから、歩荷を辞める理由が見つからないんですよ。ケガとか病気で動けなくなったら「しょうがない」って諦めもつくと思うんですけど……それまでは、今の仕事と生活を楽しんでいたいですね。

聞き書き
館山美和さん

地域の「人の輪」を広げることで尾瀬の魅力を次世代へつなぎたい

スノーボードをきっかけに尾瀬と出会い、30代で片品村に移住した館山美和さん。スキー場から見た至仏山の姿、そして「山を滑りたい」という強い思いから山の自然に興味を抱き、やがて登山ガイドの道を歩み始めました。現在は片品山岳ガイド協会の会長として、尾瀬の自然を守り、その魅力を多くの人たちに伝えようと、日々奮闘しています。そんな館山さんに、尾瀬の魅力や、尾瀬が抱える課題と解決に向けた取り組み、そして今後のビジョンについてお話をうかがいました。

たてやま・みわ／1973年生まれ、神奈川育ち。20代でスノーボードと出会い、アルペン競技のプロ選手として活動する傍ら登山ガイドの道へ。現在は尾瀬国立公園を中心にガイドとして活動している。2022年春に片品山岳ガイド協会会長に就任。外来種駆除や登山道整備など、自然保護活動にも積極的に取り組んでいる。自然の魅力を次世代に伝えることを使命とし、地域と連携した持続可能な観光と自然保護の両立を目指している。

スノーボードに導かれて尾瀬と出会う

子供時代は、郊外に住んでいたこともあり、身近に自然も多く、外で遊ぶことが多かったですね。都会に近い場所でしたが、当時はまだあまり開発されていないところもあったので。新道下ののり面や、近くの森でよく遊んでいました。また、横浜市の緑区にいた小学校低学年の頃、学校の裏手には防空壕があって、みんなでその中に入って探検したり、高台に抜けられる場所があったので、そこでよく遊んでいましたね。そういう体験が自然への興味につながったのかもしれません。1人で探検して、誰もいない森の中や脇道に入っていくのが好きでした。「ここを歩いていくとどこに抜けていくんだろう」と考えながら散策するのが楽しい時間でした。

スノーボードと出会ったのは20歳くらいのときです。友達に誘われて新潟・湯沢のスキー場でアルバイトをしながらスキーをしていたときに、1枚の板で滑る乗り物を初めて知り、試しに履いてみたのが最初の出会いでした。翌年の冬、板を買って滑ってみると、自分が思っていた以上にうまく滑れたんです。当時、人生のなかで目指すものが見えていなくて、やりたいことを探していた私にとって、「これならずっと続けられるかもしれない」と思った瞬間でした。その後、片品村にある丸沼高原スキー場をベースに活動するようになり、アマチュアで10年弱、プロで5年間競技生活を続けました。

そんなある日、丸沼のパトロール隊長から「最近、スノーボードのお客さんも増えてきたし、同じスノーボーダーがパトロールにいたほうが伝わりやすいから、手伝ってもらえないか」って誘われて、非常勤のパトロール隊員になったんです。

入隊して、先輩パトロールから各コース・作業の案内をしてもらうなかで、ロープウェイ山頂から真っ白い山が見えたんです。そのとき先輩から「あの山は尾瀬にある至仏山という山で、滑れるんだよ」と聞いたときは衝撃を受けました。「山で滑れるんだ！」と知り、バックカントリーへの興味が膨らみました。片品山岳ガイド協会との出会いは、パトロールを手伝ったころ。片品村に移住した翌年のことです。知り合いに「尾瀬で女性のガイドを探しているんだけど、やってみない？」と声をかけられたのがきっかけでした。バックカントリーを滑るためには、山に関する知識が必要なので、「山の勉強をするにはどうしたらいいだろう？」と考えていたところでした。山を知ることができるかもしれないと思い、「やります、やります！」って手を挙げたんです。

最初は見習いという形で、先輩ガイドが担当するツアーに同行させてもらい初めて尾瀬に入りました。最初の尾瀬は龍宮小屋までの日帰りツアーでかなり長い距離を歩きました。当時、歩くことにあまり慣れていない私は、帰りに脚が痛くて痛くてつらかった記憶が残っています。とにかく広い尾瀬ヶ原に驚き、見たこともない花が咲いていることに心躍りました。ミズバショウを初めて見たのもこのときです。だんだんと尾瀬の木道歩きにも慣れて、動植物を知ることが楽しくて。また、先輩ガイドに同行して尾瀬についての話を聞くのが楽しかったですね。

龍宮小屋で山小屋の仕事も経験しました。初めての山小屋業務に携わり、「登山者になにかあった場合の救助や受け入れ窓口」としての役割など、山小屋の重要性を実感しました。実際に、宿泊予約があるのに下山してこないお客様がいて、スタッフが探しに行くと疲れて歩けなくなってビバーク（＝不測の事態により野宿）をしていたこともありました。山小屋には、宿泊や休憩の提供だけではなく、遭難防止・情報提供・避難場所としての重要な役割があって、ガイドとしてもたくさんの情報を提供してもらえます。山小屋での1ヶ月ほどの経験で、重要性を学ぶことができました。歩荷さんと尾瀬の関わりも知ることができましたね。

至仏山の山頂にて。　写真提供／館山美和

至仏山の山頂から見た燧ヶ岳と尾瀬ヶ原。
写真提供／館山美和

尾瀬ハイクの拠点の一つである鳩待峠。2025年には新たにカフェや宿泊施設などがオープンした。

多様な人たちと連携し尾瀬の課題と向き合う日々

片品村山岳ガイド協会は1990年の設立で、現在23人の正会員が所属していて、尾瀬をはじめ群馬北部・周辺の山々のガイドを行っています。

旅行会社のツアー客が中心で、個人のお客

草紅葉に染まる尾瀬ヶ原の池塘群。背景には燧ヶ岳が見える。

様は1割か2割くらいです。グリーンシーズン（夏）は10人～15人ぐらいのパーティーを中心にガイドしていて、5月の終わりから6月いっぱいはフル稼働状態です。冬は個人的にスクールを中心に１００人くらい、バックカントリーツアーなども合わせると１３０人弱くらいでしょうか。

ガイドとしての仕事はもちろん「お客様に、安全に、自然を楽しんでいただく」ということがベースになるんですけど、私自身としては、「自然と人間のつながりや関わり」みたいなものに気付いてもらえるような案内ができたら、さらにうれしいですね。

２０２２年春からは、片品村山岳ガイド協会の会長を務めています。私は3代目なんですが、尾瀬を知り尽くしたメンバーが大勢いるなか、移住者で、女性の私に、「次の会長を」と頼まれたときはびっくりしました。私のいいところなのか悪いところなのか、年齢が上の人にもときどきズバっと言ってしまうところがあります。怖いもの知らずなんですよね（笑）。もしかすると、そんなところが評価されたのかもしれません。

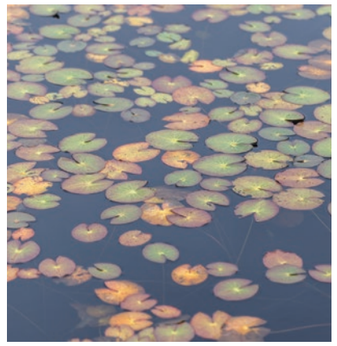
会長になってからは、環境省の方や村役場の方など、尾瀬に関わる多くの方々と話をする機会が増えました。以前はみなさんの仕事の表面だけしか見えていなかったのですが、一緒に仕事をするようになって、私が思う以上にさまざまな問題意識を持ち、仕事をしてくださっていることがよくわかりました。こうした方々と協力しながら、さまざまな課題を解決し、魅力的な尾瀬づくりの手伝いができたらと思います。

今、協会として力を入れている取り組みの一つが、外来種の問題です。尾瀬の周辺ではハルザキヤマガラシ、オオキンケイギク、オオハンゴンソウ、セイタカアワダチソウなどの外来種が増えていて、放置すると生態系に悪影響を及ぼす危険があるんです。私たちから「外来種の駆除をやりませんか」と提案し、村民のみなさんと、村内の外来種の防除や、尾瀬のゴミ拾いツアーなどを企画し、村の事業として実施させていただいています。

また、登山道の整備も行っています。以前、見晴地区で休憩しているときに、燧ヶ岳の見晴新道から下山したと思われる登山者が、全身泥んこ状態だったのを見かけたんです。おそらく、つらいぬかるみルートをやっと下りてこられたんでしょうね。私自身、以前から登山道の状態の悪さは感じていたのですが、尾瀬国立公園は特別天然記念物に指定されているので、そのエリアは簡単に手を入れることはできないんです。だから「地元のガイドなのになにもできないのが残念だな」と悔しい思いをしていたんですよね。

そんな流れのなかで、２０２２年に、日本山岳ガイド協会・自然ふれあい集会の講演があって、テーマが「登山道整備ツアー」でした。その際に、北杜市の山で登山道整備を始めた山岳ガイドの話をお聞きして、「尾瀬でもそんな活動ができたらいいな」と思うようになりました。登山道整備ツアーというのは、一般利用者が登山道の整備作業に参加することで、保全と利用を持続的に循環させようという仕組みの一つです。参加者には、その土地の植生や歴史を学びながら、保全活動に参加できるというメリットがあります。ここ数年は、環境省の事業を活用して、少しずつ尾瀬の中も整備が実施できるようになってきました。また、群馬や福島でも県の事業として登山道整備ツアーが行われるようになり、木道や登山道の補修と復元に携われるようになりました。

きれいに整備された木道を歩く。



尾瀬ヶ原の池塘に浮かぶヒツジグサの紅葉。

現在、私たちがトライしている整備方法の一つが、「近自然工法」。これは、荒れてしまった登山道を回復させることが一番の目的です。たとえば、ガリー（洗掘＝雨水の流れによって地表面が削られて段差ができてしまった地形）では、倒木などを使って土砂を溜めたり、水切りを引いたりしながら浸食を止め、また、流れてくる土を受け止めるための「土留め」を築いて対処します。近自然工法は、元々あった生態系のかたちに導くように施工を行う……、つまり、自然を利用しながら、同時に、自然に対する優しさを考えながら整備するということですね。

自然の楽しさや地元の文化を多くの子供たちに伝えたい

今後は、シカ対策に関する「知る機会の創出」を、もっとやっていけたらいいなと思っています。今年の夏には「尾瀬かたしなゼロカーボンフォーラム」（片品村が主催する尾瀬のイベント）のなかで、「尾瀬×シカ」をテーマにパネルディスカッションを開催しました。まず環境省の方から、尾瀬にシカが入ってきた経緯やその影響についての話を聞き、環境省の委託を受けて自然環境の調査などを行っている企業からは、シカの行動や、柵の内側では植物がどれくらい増えるかといった効果検証の結果についての話を聞きました。また、猟師さんが駆除したシカの皮を有効利用するためにレザー製品を作っている職人さんからは、シカ革でできたサコッシュなどを見せていただき、駆除されるシカを循環させていく方法や現状を知る、良い機会でした。

ひと口に「シカ問題」と言っても、さまざまな視点があります。地元の方々はもちろん、観光で訪れた人たちにも、「どのような経緯を経て、現在の状態があるのか」や、「柵を設置することによって、柵の中の植物はシカの食害から守られている」ことを知っていただき、今後も柵の設置や獣害駆除を続けていくことによって、尾瀬の植物を守りつなげていくことの重要性を理解していただけたらうれしいですね。

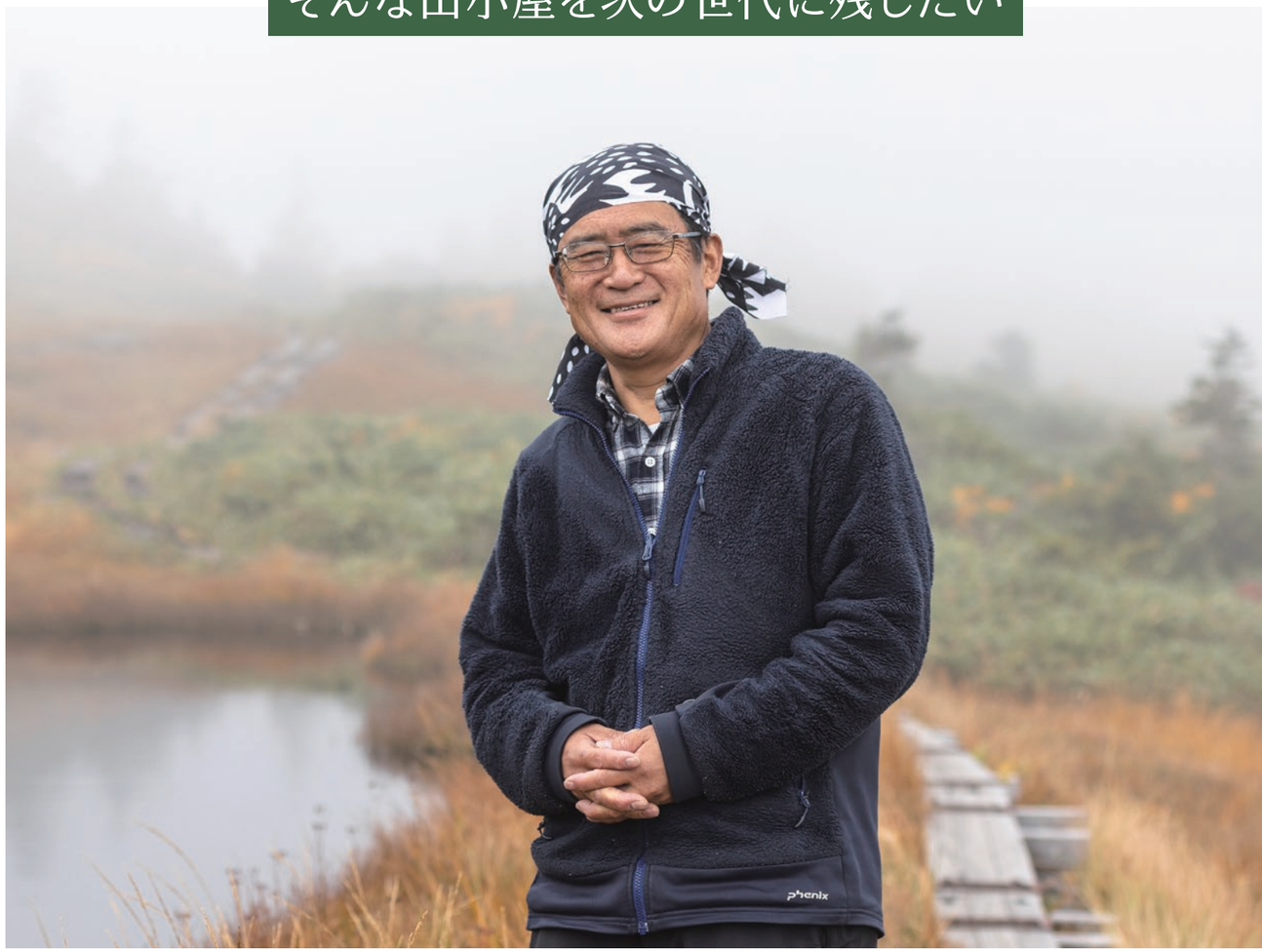
また、尾瀬の自然を次世代につなぐための活動にも力を注いでいきたいです。片品村の子供たちは自然の中で遊ぶ機会が少なくなっているように思います。村の自然や尾瀬のことをあまり知らない子供たちが多いのかな、と。なので、地域の歴史や、村に伝わる文化なども含めて、今の子供たちに知ってもらう機会を作りたいですね。そこで、尾瀬をもっと知るための「尾瀬キッズプログラム」という企画をつくりました。今年はうまくいきませんでしたが、仲間うちで試してみて、来年は村の子供たちや沼田の子供たち、さらには県外の子供たちにも広げられるようなプログラムを作っていけたらなと思っています。

私は、大好きなスノーボードをきっかけに尾瀬と出会い、片品村に移り住んで20年以上になります。そんな私にとっての尾瀬の魅力は、優しいというか、女性らしい感じがするところでしょうか。尾瀬ヶ原に入ってくるまでは少し長いけれど、湿原まで下りてくると、のんびり過ごせる「広さ」がいいんですよね。忙しい日々のなか、ふと思い立って尾瀬の湿原まで下りてきて、包み込まれるような湿原の中でゆったりと過ごしてほしいです。池塘をずっとのぞいていると、いろいろ見えてきて面白いんですよ。また、尾瀬沼の湖畔にいる野鳥の観察も楽しい。中に下りたらあまり動かず眺めるのもおすすめ。もう少し足を伸ばしたい人には「もうちょっと頑張って山に登ってみよう」など選べる自由さがあります。思い思いのスタイルで、ぜひみなさんに尾瀬を楽しんでほしいですね。

「思い思いのスタイルで楽しむことができるのが、尾瀬の最大の魅力」と語る館山さん。

聞き書き
三橋一弘さん

自然にも、働く人にも優しい そんな山小屋を次の世代に残したい



「やっぱり好きなんですよね。自然の中にいるのが……」。夫婦二人三脚で「駒の小屋」を運営する三橋一弘さんは、窓外の風景に目をやりながら、そう語ってくれました。尾瀬の美しい自然と檜枝岐（ひのえまた）村の人たちの人柄に魅せられ、山小屋の主人となって19年目。駒の小屋は、「1度泊まると、また泊まりたくなる山小屋」として、多くの登山客に愛されつづけてきました。三橋さんは今、この自然と山小屋を次の世代に手渡す日をイメージしながら、準備を始めています。

みはし・かずひろ／1962年生まれ。神奈川県横浜市出身。会社勤めを経て、北アルプスや檜枝岐村で山小屋仕事の経験を積み、2008年から「駒の小屋」を夫婦で運営。宿泊は素泊まりのみで、食事は自炊や持ち寄り、夜はランプの灯りの下で宿泊客が語らうスタイルが人気を集めている。映画・演劇・歌舞伎鑑賞などが趣味で、これまでに観た映画は約2500本。「働く人にやさしい山小屋」を目指して法人化し、社会保険や有給休暇、退職金制度なども整備した。

檜枝岐村との出会いは友人が紹介してくれたアルバイト

生まれたのは横浜の戸塚で、生まれてすぐに綾瀬に引っ越しました。小さいころは父親に連れられて里山に行ったり、高校を卒業してからは丹沢に行ったり、山登りはずっと好きでしたね。高校卒業後、東京に出て10年ぐらい会社勤めをしてました。その後、会社を辞めて、父が亡くなって……まあ、ブラブラしてたんですよね。インドへ行ったりとか、当時は独身ですから「気楽に生きたいな」みたいな感じで。

そんなとき、友達が「いつまでもブラブラしててもしょうがないだろう」って紹介してくれたのが、尾瀬御池ロッジのアルバイトだったんです。30歳になる年だから1992年ですね。それが、檜枝岐村とのご縁でした。尾瀬は初めてだったんですけど、特に不安はなかったですね。もともとのんきな性格なんで「まぁ行けばなんとかなる」と思ってました。

で、実際に来てみると、尾瀬の自然の素晴らしさと、村の人たちの人柄に惹かれましたね、みんなすごいのんびりしていて。その後も、御池ロッジで半年アルバイトして、残りの半年はブラブラして、っていう生活が何年か続いてたんです。だけど30代も半ばになると、さすがに自分でも「ちゃんと働かなきゃいけないな」って思うようになってきたんです。

そんなとき、北アルプスでは通年で正社員として仕事ができるという話を聞いて、中房温泉グループという会社で働くことにしました。春から秋は「檜ヶ岳殺生ヒュッテ」で働いて、冬になると、グループが経営する麓の中房温泉で仕事をしてましたね。

今になって振り返ってみると、尾瀬では、檜枝岐村の人たちから花の名前、山菜とかキノコの知識、料理なんかを教わって、北アルプスではアルパインクライミングの技術を教わりました。その両方を学べたことは、自分のなかでは良かったなと思ってます。

北アルプスでは7年働いたんですけど、あるとき、檜枝岐でご縁のあった役場の方から、「駒の小屋の運営をしてくれる人を募集してるんだけど、お前どうだ？」ってお話を頂いたんです。駒の小屋は、建物は檜枝岐村の所有で、委託管理という形なんですよね。

駒ノ大池の向こうに会津駒ヶ岳山頂を望む。

僕自身、山小屋の仕事を続けるなかで「いつかは自分で小屋の経営をやってみたいな」って気持ちはあったので、「じゃあ、ぜひ」ということで尾瀬に戻ってきたんです。当時つきあっていた今の妻も自然や山が大好きで、尾瀬の龍宮小屋とか、南アルプスの広河原山荘でアルバイトしてたんですけど、これを機に結婚して、二人で駒の小屋を経営することになりました。尾瀬が国立公園になった翌年ですから2008年のことです。2026年で19年目になりますね。

「都会の価値観を山の上に」そんな競争には乗りたくなかった

駒の小屋は素泊まりが基本なんですけど、当時は北アルプスでも尾瀬でも「山小屋は食事付き」が当たり前だったので、正直、「素泊まりでやっていけるもんかなぁ」っていう不安はありました。ただ、当時は「食事がおいしい」とか、「お風呂が立派だ」というような山小屋が人気で、「都会の価値観をいかに山の上まで引っ張り上げるか」の競争になってたので、その競争には乗りたくないと思ってました。不安ではありましたが、家内と話し合って「素泊まりで、自炊や持ち寄りでみんなが集まって食事をするようなスタイルでいこう」って決めたんです。夫婦二人でやっていく分には、経費もそれほどかからないだろうという気楽さもありました。

ただ、実際に小屋の運営を始めてみると、思ったよりも大変でした。最初のうちはお客さんも少なくてラクだったんですけど、だんだん常連さんも増えてきて……。でも常連さんが増えたおかげでラクになったこともあるんです。みんなが仕事を手伝ってくれるんですよ。特に小屋開きと小屋じまいには毎年同じメンバーが来てくれて、僕が指示しなくても完璧に仕事をこなしてくれます。もちろん、税込3300円の宿泊料は頂くんですけどね（笑）。昔は雪掘りなんかも1人で、1ヶ月以上かかってやってたのに、今は15人ぐらい来て一気にやってくれるので、1日か2日で終わるんですよ。経営的には大変ですけど、肉体的にはだいぶラクになりましたね。

駒の小屋のグッズは、家内のデザインが多いですね。彼女は特にデザインの勉強をしたわけではないんですけど、好きなので楽しんでやってくれてます。おかげさまでお客さんにも喜んでいただいて、ありがたいことです。最初は、お客さんから「この小屋ではバッジ

会津駒ヶ岳の頂上直下に建つ駒の小屋。

売ってないの？」って言われたところから始まったんです。百名山のバッジをコレクションしてる人もいますからね。その後も「手ぬぐいないの？」「Tシャツないの？」「ほかの小屋にはこんなグッズもあるよ」とか言われて、じゃあ作ろうか、っていうことで。

手ぬぐいは、江戸時代から続く須賀川の染物屋さんがウチの常連で、相談したら「できるよ」って言ってくれたんです。「それじゃお願いします」ってことで、今もその方に作ってもらってます。基本的に僕は、自分からなにかやるっていうよりも、「せっかくご縁を頂いたから、じゃあ頑張ろう」っていうタイプなんですよね（笑）。

小屋を受け継いで最初の5年間は個人事業主としてやってたんですけど、その後、「国内旅行業務取扱管理者」の試験に受かって旅行代理店を創業したのを機に、小屋の経営も法人化しました。その際に社会保険や退職金共済にも加入したんです。そういう労働環境の整備も、大きい山小屋はしっかりしてますけど、小さい小屋だとなかなか行き届いてないというのが現状なんです。その点、きちんとシステムさえ作っておけば、僕がリタイアした後もスムーズに引き継ぎができる……そんな思いもあって法人化したんです。

宿泊は素泊まりのみ。１人１組、布団が用意されている。

ツアーですか？　最初のうちは、小屋はハイシーズンでもそんなに忙しくなかったので、常連さんを中心にツアー組んで尾瀬に行ったりしてたんですけど、今は小屋が忙しくなってきたので、シーズン中は難しくなりましたね。今年はシーズンオフの11月と12月に4本のツアーを企画してるんです。檜枝岐歌舞伎の元座長さんを招いて、食事をしながら歌舞伎や村の文化について話を聞くツアー、スノーシューで雪山を歩くツアーとかね。

檜枝岐村には、山だけでなく、そば料理とか歌舞伎とか、いろんな地域資源があるので、ツアーは作りやすいですね。最近では、移住してきた女の子が星空観察会を始めたり、新しいコンテンツを発見してツアーをやっている人もいます。アウトドア志向の人にとっては働きやすい環境だと思いますね。

急登の先に湿原と花畑が広がる それが会津駒ヶ岳の魅力

会津駒ヶ岳の特徴といえば、なんといっても登り始めのブナ林の急登ですね。ほかの山は、最初は緩やかで、登るにつれて急勾配になる山が多いですけど、ここはいきなり急登なんです。水場を過ぎてオオシラビソ帯を抜けると緩やかになって、湿原と稜線の景色が広がる……これが魅力ですね。

奥様がデザインを手がける小屋のオリジナルグッズが登山者に人気。

斜面なのに湿原が広がっているのも特徴です。本来、斜面に湿原はできません。雪が溶けると水や土が流れ落ちてしまうからです。しかしこの山では、冬の間に厚く積もった雪が「雪田」として長く残り、地面を平らに守るように覆ってくれる。そのおかげで、斜面の途中でも湿原が保たれているんです。

あとは花の魅力ですね。7月下旬～8月中旬くらいまではハクサンコザクラ。ピンクの小さい花をまいたように、一面にパーッと咲くんです。最近の夏は暑くて大変ですけど、この時期は多くの登山客が訪れます。

お客さんは、昔は中年の方が多かったですけど、最近は若い人たちもたくさん登ってこられるようになりましたね。ここは日帰りも可能な山ではあるけど、早い時間に駒の小屋にチェックインして、荷物を置いて湿原の周りをゆっくり散策したり、夜は外のベンチで星空を眺めたり、自炊室でほかの宿泊客と山の話をしたり、昔に比べて「のんびり山の時間を楽しみたい」という人が増えてきているような気がします。

だからこそ、お客さんの満足度と住環境保全の両立が大事になってきますよね。

小屋の定員は、コロナ以前は30名だったんですけど、今は15名ぐらいです。小屋の規模を考えると、30名ではちょっと窮屈ですね。ゆったり過ごしていただくには、これぐらいがちょうどいいんじゃないでしょうか。

お手洗いは便槽ごとヘリで下に降ろしてバキュームカーで空にした後、またヘリで小屋まで運んできます。これは檜枝岐村がやってくれています。

木道も、以前は朽ちて壊れているところも多かったんですけど、環境省、福島県、檜枝岐村で予算を割り振っていただいて、ここ10年でかなり整備されました。やっぱり木道が悪いと、どうしても湿原に踏み込んだりしちゃいますからね。

尾瀬国立公園は、日光国立公園から尾瀬地域を分割して、会津駒ヶ岳、田代山、帝釈山などの周辺地域を編入する形で指定されたんですけど、檜枝岐の人たちには、以前から、「会津駒を国立公園の中に入れたい」っていう強い思いがあったみたいですね。当時、日本百名山の中で、山頂が国立公園でも国定公園でも県立自然公園でもない山は、会津駒と上州武尊山（じょうしゅうほたかやま）だけだったんです。

高層湿原が広がる山頂周辺では、美しい山岳風景を楽しむことができる。

檜枝岐の人たちには独立独歩の気風があって、たとえば檜枝岐歌舞伎って、あんなに有名なのに、国の重要無形民俗文化財になってないんですよ。それは、村の人たちが断ったからだそうです。そんな誇り高い村人たちが、「会津駒を国立公園に」と熱望していたみたいです。特にここは貴重な植物の湿原があるところなので、そういう法的な枠組みを使って守りたいと思っていたんでしょうね。

だから村では、尾瀬国立公園が指定された8月30日を、条例で「尾瀬の日」と定めて、その日は村内の公衆浴場に無料で入れるとか、さまざまなイベントを開催しています。「あのときの思いを忘れないように」みたいな感じですね。

長く続けてこられたのは、自然の中にいるのが好きだから

僕は今63歳なんですけど、70歳まではなんとか頑張って続けていきたいと思っています。体力的にはなかなきついですけどね。麓から担いでくる荷物も、昔は30キロ以上のものを持ったりもしましたけど、今は重くても20キロぐらいにして、体がきつくなる前にケアしたりとか、そういう工夫はしてます。本当に悪くなってからだと、どうしようもなくなってしまいますからね。

夫婦で山小屋の運営を始めて、もうじき20年になりますけど、長く続けてこられたのは、やっぱり自然の中にいるのが好きだからでしょうね。

自然の中にいて、山好きな人たちが集まってきてくれて、みんなで飲んだり食べたりするのは楽しいし、秋になれば紅葉を、夏は花を楽しんで、きれいな星空を眺めたりとか……そういうこと自体が大好きなんです。アウトドア嫌いな人が、ただ仕事として稼ぐために山に入るとしたら、けっこうつらいですもんね。

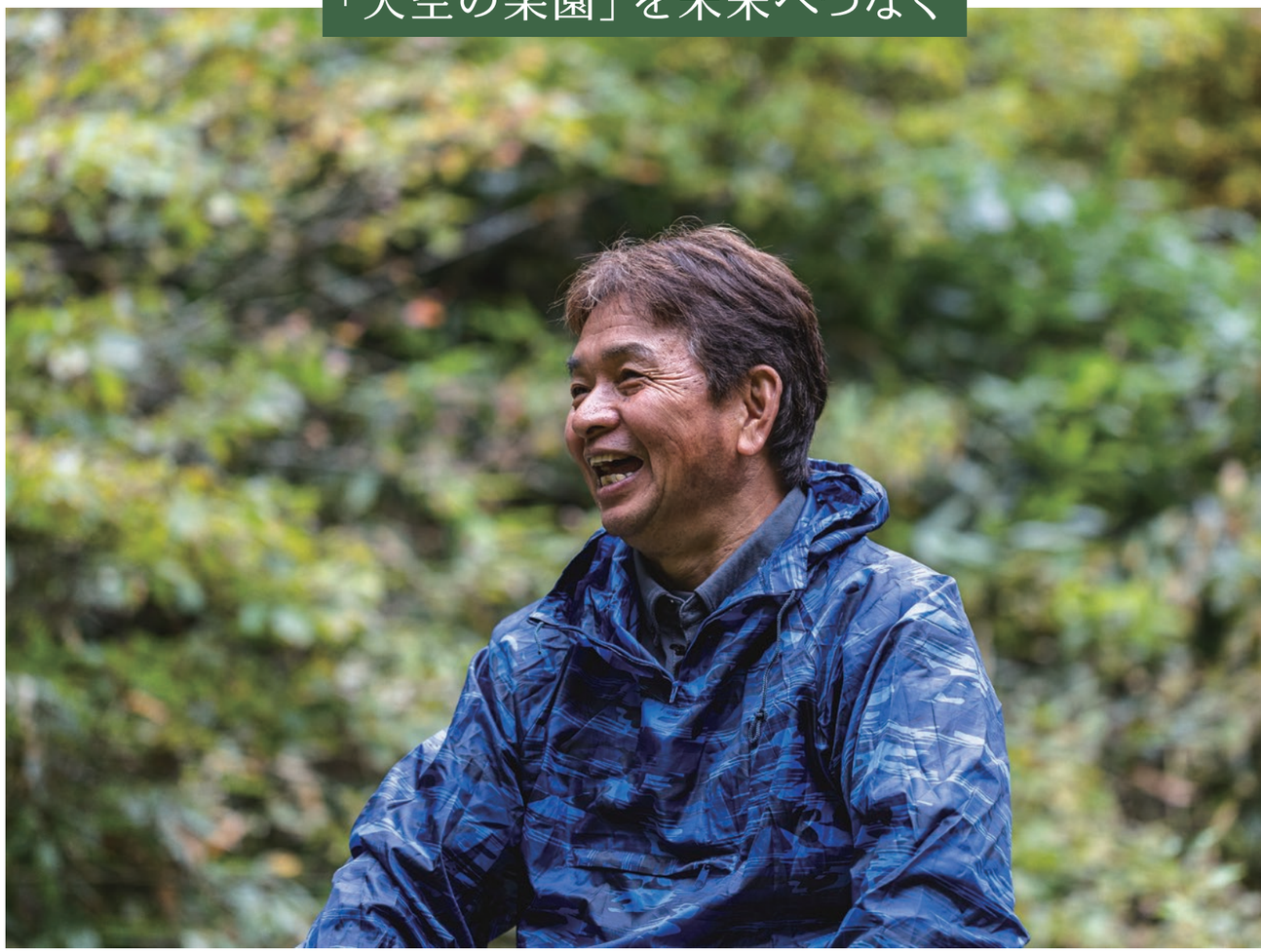
冬の間は東京に行って、ツアーの新商品開発をしたり、勉強会に参加したりするんですけど、そのときに芝居や美術館、クラシックコンサートを楽しんでいます。そういうメリハリがあるのも、長く続けてこられた理由かもしれません。

夫婦の役割分担ですか？　それは、彼女がやれって言ったことを僕が黙々とやっているだけです（笑）。決してノーと言わない……それも長く続けられた理由の一つかもしれませんね。

「小屋に来てくれる人たちと語らう時間が楽しみ」と三橋さん。

聞き書き
平野睦夫さん

愛情をこめて手入れをすることで「天空の楽園」を未来へつなぐ



田代山は、尾瀬国立公園の特別保護地区に指定されている山頂湿原と、豊かな高山植物、雄大な眺望で知られる人気の登山スポットです。平野睦夫さんは、この山の魅力を守り、訪れる人々に安全で快適な環境を提供しようと、長年にわたって登山道の整備やトイレの管理に携わってきました。その長年の取り組みや田代山への思い、そして未来への展望について、平野さんにお話をうかがいました。

ひらの・むつお／1961年生まれ。檜枝岐村出身。南会津町在住。幼少期から自然に囲まれて育ち、3歳からスキーを始める。16歳からの会社勤務を経て、冬はスキーインストラクター、夏は尾瀬ガイドや設備関係の仕事に従事。南会津町の委託を受け、2012年から田代山の巡視員としてトイレ管理や登山道整備に携わり、山の環境保全と訪問者の安全確保に貢献してきた。2025年シーズンを最後に一線を退くが、「今後もときどきは山の様子を見に行くつもり」と語る。

日々の手入れによって明るくなった登山道。段差が高すぎないため歩きやすい。

自然に親しむ幼少時代を経てスキー講師、ガイドの道へ

檜枝岐村で生まれて、子供の頃から尾瀬沼や尾瀬ヶ原へ行くことが多かったです。普段の遊び場は裏山や川。秋だったらヤマブドウやアケビ、コクワなんかをとって食べたり、川ではイワナやヤマメをとったりして遊んでましたね。魚は、釣りもしましたけど、水中メガネをかけて川に潜ってとったりもしてました。シュノーケリングじゃないけど、そんな感じです。冬はスキーですね。初めてスキーを履いたのは3歳のときで、小学校4年生くらいまでは、学校に行くときはスキーやかんじきを履いて通学していました。

実家は民宿を経営していて、きょうだいが多かったんですよね。私は六男です。だから親は「早く就職してほしい」っていう感じでしたね。それで16歳のときに食品関係の会社に就職しました。

その後、住宅設備の会社に転職したんですけど、23歳のときに先輩に勧められて、冬場の仕事としてスキーのインストラクターを始めました。檜枝岐には、「山小屋のオーナーでプロスキーヤー」という人がけっこう多いんです。その人たちが冬はスキー場でインストラクターの仕事もされているんです。あるとき、檜枝岐のスキー場で滑ってたら、「インストラクターやってみないか?」って声をかけられたんです。それがきっかけでした。

その当時、競技スキーの大会にはときどき出てましたけど、プロスキーヤーのなかに入ると、スキーがうまいっていうほどではなかったんで、最初は「うまく教えられるかなぁ」って不安はありましたね。学校のスキー授業の生徒とか、スキーの資格を取りたい人とか、そういった方たちに教えてました。

何年かすると、スクールを運営する会社で管理職になったんです。これがガイドを始めるきっかけになりました。若いインストラクターたちは、冬はスキーで働けるんですけど、夏になると仕事を探さなくちゃいけない。「なにか手立てはないかな」ということで、会社の事業として新たにガイド業を始めたんです。一般の方を尾瀬に案内したり、子供向けには「民泊体験」といって、地元のお宅に泊まって、農業や林業の仕事を体験したり、郷土料理をつくって食べたり、田舎でしか体験できないようなことをやるわけです。

ガイドをするときには、みんなに楽しんでもらいたいということで、花や山の説明をしながら歩くんですけど、真面目に説明しても、誰も覚えてくれないんです。だからなんとか興味を引こうと思って、ときどきダジャレを交えながらガイドしたりするんです。たとえば、ニッコウキスゲが満開の時期で天気が良い日には、特に女性は日焼けしたくないから長袖を着ている人も多いじゃないですか。そんなときに「結構、着過ぎ（ケッコウキスギ）ですね」なんて言ったりね。こっちは興味を持ってもらおうと思ってやってるんですけど、お客さんからしたら「ヘンなおじさんだな」って思ったかもしれませんね（笑）。

あらかじめ乾燥させておいた木の先端を、ナタで削って尖らせることで杭をつくる。

登山客が喜んでくれることが日々の仕事のやりがいに

巡視員になったのは2012年だったかな。田代山は、子供の頃に親に連れられて登ったことがあるぐらいで、それ以降はほとんど関わりがなかったですから、このときが「田代山との縁」の始まりと言っていいでしょうね。きっかけは、環境省が田代山のトイレを新しく整備したことでした。役場の人から「誰か管理してくれる人いないかな」って言われて引き受けたんです。私がたまたま住宅設備の仕事もやってたんで、設備の修繕も任せられるということで声がかかったんでしょうね。

巡視員の仕事は、登山道の整備・刈り払い、田代山頂と猿倉駐車場のトイレの維持管理のほかに、国立公園内の巡視、登山者への啓発指導、高山植物の保護なんかが含まれています。仕事は5月～10月の終わりまで。「3日通ったら1日休み」というペースです。

以前は1人で巡視員の仕事をやってたみたいですけど、私が携わるようになったときから2人体制になりました。というのは、新しいトイレは汚物を貯めるタンクがいっぱいになるとヘリで下ろすんですけど、1トンぐらいの重さになるんで、吊り上げる場所まで移動するのが1人では大変なんです。

後々の整備のしやすさも考慮して、簡素なつくりで整備するよう心がけている。

“相棒”の馬場茂さん（写真右）と。登山者が快適に山を楽しめるよう、協力して整備を進めてきた。

昨年からは、馬場茂さんとペアで仕事をしています。大きな補修は2人で対応して、日常の作業は、草刈りやトイレ掃除を分担して行っている感じですね。あと、茂さんは自衛隊や消防、アウトドア関連企業の経験があるので、その経験を生かして、登山者の安全確保や救助にも対応してくれています。

トイレは毎日掃除しています。常にきれいにしておくと、やっぱりきれいに使ってもらえるんですよね。水は雨水タンクに貯めた水を使っているので、こうした水回り設備の保守点検作業もやっています。

最初の頃は、土足で入れるようにしてたので、床がものすごく汚れて困ったんです。で、なんとかならないかなと知恵を絞って、「靴のまま履けるスリッパ」を用意したんですよ。それからはだいぶきれいになりましたね。その後、檜枝岐村の役場の人がそれを見たらしくて、今では尾瀬のトイレでも、このタイプのスリッパを導入してるみたいです。あとは、ゴミが出ないように「芯のないトイレットペーパー」を導入したり、いろんな工夫をしながら「日本一きれいな山のトイレ」を目指してます。登ってきたお客さんだって、きれいなトイレを見たら、「来てよかった」って思うだろうし、少しは疲れも癒えるかもしれない……そう思ってもらえたらうれしいですよね。

私たちが初めて入ったころは、登山道の状況がひどくてね。クマザサが生い茂って道を覆ってたり、石がゴロゴロしてたり、ドロドロにぬかるんだ道も多くて、登山靴や長靴でないと歩けないような場所もあったんです。そこで、クマザサを刈り払って道幅を広げたり、倒木や枯死した木、その場にある石なんかを使って歩きやすい高さに階段を整備したり、ぬかるみやすい場所には溝を切って雨水の逃げ道をつくったりして少しずつ整備してきました。あと、岩場が多いところは、楽に上がれるように工夫しています。

歩きやすくなったんで、以前は山頂の湿原まで行くのに1時間半ぐらいかかってたところが、今は1時間ぐらいで上がれるようになりました。お客さんからも「段差が緩やかになって登りやすくなった」とか、「足場が安定した」って言っていただくので、そういう点ではやりがいがありますね。

登山道整備で日当たりや風通しが良くなったことで、うれしいことに花も増えてきたんですよ。ゴゼンタチバナやイチヨウラン、マイヅルソウ、ツバメオモトとかね。せっかく来てくれたお客さんに、「ああ、ここにこんな花が咲いてる」って喜んでもらいたいですもんね。コツコツ続けてきたかいあって、田代山は、「登山道でも花を楽しめて、頂上の湿原でもまた違う花が楽しめるという山」になってきたかなと思います。

登山口も、最初に来たときは一面の竹やぶで、暗い印象だったんですよ。これじゃいけないと思って竹を刈り払ったら、少しずつガクアジサイが増えてきたんです。環境が変わったから花が咲くようになったんですね。

田代山山頂のトイレ。一見、トイレとは思えないほどの洗練されたデザインが印象的だ。

茂さんとも「手つかずのままにしておくのが、本当の自然なのかな？」なんて話してるんですけど、私は、ただ放っとくんじゃなくて、ちょっと手を加えてあげることが大事なんじゃないかなと思います。

最近では、登山道をどのように整備しているか、新潟や長野からも視察に来るんですよ。ここを訪れたお客さんたちがSNSに載せた情報なんかを見て来られるんでしょうね。別に自慢したいわけじゃないんですけど、毎年、何度も登ってこられる方に、「あっ、今年はここが変わってるね」なんて言っていただくと、仕事の励みになりますね。

一番大変だったのは、登山道に直径50センチ以上の太い倒木が倒れかかって登山道をふさいでいたときですね。2024年のことなんですけど、たまたま用意していたチェーンソーが小さすぎて歯が立たなかったんです。でも、そのままにしておいたらお客さんが通れないじゃないですか。それで、茂さんと2人で交代しながら、手のこで少しずつ切って撤去したんです。2時間～3時間ぐらいかかったんじゃないかな。あのときは大変でしたね。

田代山は「天空の楽園」この魅力を、未来につなげたい

実は、私と茂さんは今シーズンいっぱいでこの仕事から離れるつもりなんです。13年間、手塩にかけて手入れしてきた田代山を離れるのは、ちょっと寂しいですけどね。役場の人にも伝えたんで、来シーズンからは次の人が仕事を引き継いでくれると思います。

茂さんと2人で、大がかりな整備が必要なところはだいたい直し終わったんで、あとは、階段の木が朽ちてきたら新しいものに交換するとか、杭を打ち替えるとか、悪くなったところをその都度、修繕してもらえたらいいなと思ってます。そのために、シンプルイズベストというか、近くにある材料を使って簡易な構造にしてあるんです。

私は住宅設備関係の技術や経験があるし、茂さんは板金の仕事ができるんで、今まではなるべくお金をかけない方法で修繕することができたんですよね。だから、次の人にも覚えてやってもらえたら一番いいのかなっていう思いはありますね。茂さんは、わりとハッキリものを言ってくれる人なんで、役場には冗談で「俺らがいなくなったら経費が倍以上かかるからな」って言っているんです（笑）。今後も、ときどきは田代山に来て、私たちのノウハウを伝えていきたいと思っています。

気になっている課題は、田代山湿原の木道がかなり傷んできていることですね。私も折に触れていろんな方に相談はしてるんですけど、お金がかかることもあって、なかなか進まないんです。木道を歩きにくい状態のまま放置しておくと、お客さんが湿原に足を踏み入れてしまうんですよね。

田代山の山頂湿原は、尾瀬国立公園の特別保護地区に指定されてますから、新しく構造物をつくったりするには、いろいろ規制があって難しいと思いますけど、木道がきれいに整備されれば、また新たな魅力が生まれるんじゃないかなって思います。ぜひ進めていってほしいですね。

田代山の魅力をひと言で言うなら、「天空の楽園」ですね。山頂からは、天気の良い日には燧ヶ岳、会津駒ヶ岳、三岩（みついわだけ）岳、日光連山、遠くには飯豊（いい）連峰、吾妻連峰の雄大な眺望も見渡せる……まず、この眺望が魅力です。そして湿原では、キンコウカ、ワタスゲ、イワカガミ、タテヤマリンドウ、ヒメシャクナゲ、モウセンゴケなど、さまざまな高山植物が見られます。本当にいろんな楽しみ方ができる山だと思っています。この「日本一の山」を、ぜひ次の世代につなげていきたいですね。

山頂部には、世界的にもまれな台地状の湿原が広がり高山植物も楽しむことができる。

田代山は、山容がプリンの形をしていることから「プリン山」の愛称で親しまれている。

編集後記

雪深い山々と広大な湿原が広がる尾瀬国立公園一帯には、人と自然が長い時間をかけて向き合い、関わり合ってきた歴史があります。木道を1歩進むたびに足下に広がる湿原と草花の世界は、その営みの積み重ねを静かに物語っているように感じます。

今回の取材で尾瀬を訪れたのは10月中旬、紅葉が山肌を染める季節でした。朝晩の冷え込みが強まり、湿原にはうっすらと霜が降り、澄んだ空気の向こうに燧ヶ岳や至仏山が姿を現す光景に、取材チームは何度も足を止めました。一方で、雪解けの頃の水量や夏の賑わいなど、別の季節の尾瀬の姿を、話し手のみなさまの言葉から想像する時間もまた心に残りました。

お話を伺うなかで印象的だったのは、「守られている場所」ではなく「自分たちの手で守りつづける場所」として尾瀬を見つめる視線です。山小屋の運営や登山道整備、自然再生や調査研究、歩荷としての荷物運搬など、それぞれの立場から日々の仕事に向き合う姿の奥には、この湿原や森を次の世代へ手渡したいという強い思いがありました。厳しい自然条件のなかで続けられてきたこうした数々の努力があってこそ、私たちは安心して尾瀬の景色を楽しむことができるのだと実感します。

気候変動やライフスタイルの変化、登山人口の減少、シカ問題など、尾瀬を取り巻く環境は大きく変わりつつあります。これまで当たり前だと思ってきた風景が当たり前ではなくなるかもしれない——その危うさと向き合いながら、それでもなお尾瀬に関わりつづける人々の声に耳を傾けることは、これからの国立公園のあり方を考えるうえで大きな示唆を与えてくれます。本誌が、読者のみなさまにとって尾瀬という場所を自分ごととして捉え直すきっかけになれば幸いです。

最後になりましたが、本誌の制作に当たり、多忙な日々の中で取材にご協力いただいた話し手のみなさまをはじめ、調整や情報提供にご尽力いただいた関係者のみなさまに心より感謝申し上げます。尾瀬国立公園がこれからも多くの人に愛され、その価値が次の100年へと確かに受け継がれていくことを願っています。

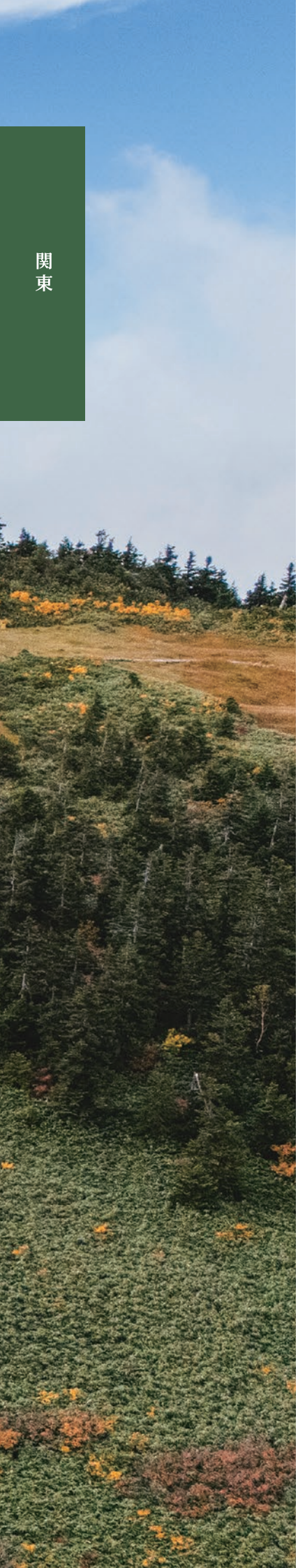
株式会社オールアバウト

尾瀬国立公園
木道に導かれて
雄大な自然と語らう
国立公園ものがたり

発行月 ……2026年3月第1刷発行
発行元 ……環境省自然環境局国立公園課国立公園利用推進室
東京都千代田区霞が関1-2-2 中央合同庁舎5号館
TEL 03-5521-8271
https://www.env.go.jp/nature/nationalparks/
企画・編集元 ……株式会社オールアバウト
東京都渋谷区恵比寿南1-15-1
A-PLACE恵比寿南3F
https://corp.allabout.co.jp/

全体管理 ……土居里佳
編集主幹 ……松井直之
デザイン進行 ……吉田拓実（一般社団法人ドット道東）
アートディレクション 名塚ちひろ（一般社団法人ドット道東）
デザイン監修 ……鈴木美里
デザイン ……川内栄子
村上三千雄（VILLAGEUP）
執筆 ……梅澤聡
撮影 ……中嶋真也
イラスト ……井上愛美（Casochi合同会社）
校正 ……天川佳代子
写真提供 ……公益財団法人尾瀬保護財団
東京パワーテクノロジー株式会社
館山美和

この印刷物は、グリーン購入法に基づく基本方針における「印刷」に係る判断の基準にしたがい、
印刷用の紙へのリサイクルに適した材料［Aランク］のみを用いて作製しています。



関東